

瞬刊

The Moment

回

2010
2/19
67



ハロシネムハスト
40

神島

第40回 ヒロシネマフェスト

ここにも映画がある ヒロシネマフェスト 映画を発見しよう

上映プログラム

第一らうんど 午後11時10分～進行 大房潤一

野菊の花がひらくころ 川田恵美 10分 DVテープ

【コメント】「犬を飼う」とゆう事は「犬を知る」と言う事ではなく、あくまで犬と接触し支配する人間のあり方を年数をかけて見つめるとゆう、ただそれだけの行為なのです。大切なのは犬と過ごしたその歳月に終止符が打たれる、最期のほんの、極めて一瞬に浮き上がってくるありのままの「犬」と素直な「自分」を見届け、生涯ここにとどめておく事なのです。

【プロフィール】川田恵美（かわだめぐみ）1987年9月3日生まれ。職業＝植物園パーク管理（土作りに精をあげています）。活動＝漫画、アニメーション、短編映像、文章、身体表現（クラシックバレエ）その他もろもろ、ジャンルに問わず表現により自分の可能性を広げていっています。栃木市在住。

それからの私の話 古屋彩子 8分 DVD

【コメント】久しぶりに高校の頃のビデオを見たら、何だかすごく楽しそうだった。今私は企業説明会やらES（エントリーシートのこと、らしい）で大変心苦しい思いをしながら生きている。

なのに過去の私は能天気な笑っている、今の私より輝いている。

そんなの癪だ、とてもカンに障る。だから追いかけてとっ捕まえて一発殴ろうと思いました。

【プロフィール】古屋彩子（ふるやあやこ） 私は絵が描けません。

大学名を口にすると、「じゃあデッサンとかするんだ、凄いね」等言われますが、残念ながら描けません。

サークルの作画メンバーの中では常にびりけつ、コンプレックスどころの騒ぎではない。絵の描けない美大生もいるんだということ、ここに証明したいと思います。

点を打つ・天を撃つ 田中里美

四分三十秒 八ミリ(サウンドはCD)

【コメント】希望は良くも悪くも失望されるためにあり

失望は希望を生み出すためにある

私たちの営みはくりかえしで、それは天からの目線でみれば、ただのくりかえしでしかない。

しかし個人は進化している

失望で立ち止まることをやめ、希望に向かう過程のなか

私たちは自分を愛することができる

【プロフィール】田中里美(たなかさとみ) 2010年2月現在

去年の9月から、何かにつけて“反復”という言葉に出会いました。私は強迫性障害という、精神の障害があったのでつくる人間になったのですが、それは反復の病なのです。自身の精神構造が世の中のしくみと一致することに気づいたとき、寂しさがやわらぐような思いがありました。

今年で22歳になります。

新宿と高円寺が好きです。

あなたが証人

出張クラブ2009綿毛前線 マエダシゲル **24分 コダックスーパー8**

【コメント】5月、また、たんぼぼの綿毛を撮りました。綿毛と一緒に旅にしよう。

私は、仕事から長距離の出張が多い君たち三人を養うサラリーマン。もう普通の方法では映画は作れない。そこで、思いついたのが、撮ろうというイメージを捨てて、カメラを廻せる時に撮る、出張先でカメラを廻す、子どもと散歩をしながらカメラを廻す、いきあたりばったりの撮影法。東は洞爺湖、西は熊本は人吉、いろいろ出張したけれど、君たちと散歩に行って遊んだりしたけれど、撮っているのは、花とか蜘蛛とか…。仕事と子どもに背中を向けて、見せたいのは、私の眼差し。

2月、旅の終わりに公園で子どもたちにカメラを向けました。子どもも私にカメラを向けました。梅の花が咲いていました。

【プロフィール】本名 前田茂(まえだしげる)：コダックスーパー8の出張映画作家。

鹿児島から就職上京した両親から生まれた一人っ子。堀越高等学園卒業後、東京映像芸術学院卒業、日本TVのAD、PFFの映写技師、同学院の事務、大田青果市場、築地魚市場、文芸座映写技師、ビデオ屋の定員、向丘遊園地のアトラクションオペレーターを経て、同時通訳のオペレーター。ハイロ映写技師。「浅草任侠クラブ」会長。娘と「つけものクラブ」を結成。48歳

あなたが証人

囧 (GONGE) 田中愛美・大倉みなみ・中村雄太 **9分 8ミリ**

【コメント】 なにかに囲まれて生きているワタシ

自然だったり、空気だったり、家族だったり、他人だったり

束縛されテ、もがいテ、夢をみテ

頭ノ中がグルグルしてるから

オモチャ箱のフタを開けてあげよう

【プロフィール】 田中愛美（たなかまなみ。米好き末っ子リーダー）

大倉みなみ（おおくらみなみ。ゆくゆくは世界のアンチテーゼへ）

中村雄太（なかむらたけひろ。お髭の魔法使い）

あなたが証人



anamnesis 谷口満耶 **4分 8ミリフィルム**

【コメント】 想起説のすべてを鵜呑みにしているわけじゃない。けれど、作品をつくりたい欲求と作品を観たい欲求はプラトニック・ラブ(天国・アイデア界・生まれる前に持ち得ていた真実の知識・情景を思い出すこと)そのものであり、集合的無意識・原型に触れたい欲求でもあると考えている。

【プロフィール】 谷口満耶（たにぐちまや）混乱と全肯定、祝祭への旅路を目指して。多摩美の映像演劇学科一年。最近、フェリーニの映画と大島弓子の漫画が生活の中に足りていないためか、幼い頃のようにお婆けがこわい

午前0時10分 休憩トーク 司会：大房

第二らうんど	午後11時10分～	進行 大房潤一
--------	-----------	---------

百年 権藤花子 20分 8mm

【コメント】昔そこには何もなくて、ただ風が吹いていた。

今は何かがあって誰かが居てただ風が吹いていない。

単純な事で、風は自分の手の中にあった。マニ車のように、

くると回転させれば文字は瞬時に話し言葉の風になる。

近くへ呟いた。遠くへ大きく（それでも）呟いた。

【プロフィール】権藤花子（ごんどうはなこ）枕元にカメラがあれば良い、そんな映画は嬉しい。そう思ってカメラを構えます。人の会話のような映画を撮っています。今年百年という初のシリーズ作品を制作しています。

光ったら、見つめる 藤田宗 10分 8mm

【コメント】足もとに目の前の景色が反射したとき、光は色褪せる。または床の色に染まったように見える。丸みを帯びる。さて、欠片はどこへ飛び散ったのか？

飛び散って、粉になった光は球を形作る、決して焦点を合わせることの出来ない粉の塊がゆったりと近づいては消える。

塊が目の前の光景と重なり合った時に少しは納得するのか。具体的であることに納得をしたいからか。

【プロフィール】藤田崇（ふじたたかし）1984年1月10日生まれ。多摩美術大学にて映画制作を学ぶ。現在、TWO LINES（浦裕幸、山口晋似郎）の主催するイベントにて、スライドプロジェクターやドライアイス、鏡を用いた即興演奏、パフォーマンスを行なう。

緑ノ影 藤澤まどか 10分 8mm カセットテープ

【コメント】目をつむりカメラを持ち、眉間上の窓に陽を射すと世界はこんなにも近い。撮影することは進行で、侵攻で、信仰かもと最近感じている。

「緑ノ影」はもともと「緑ノ影、唄フ」として2009年12月に他人を通して演じられた作品でありたにんのくちから生まれたことば。そうぞうのことばでした。

【プロフィール】藤澤まどか（ふじさわまどか）四人兄弟の長女で一番目双子座のB

型で女性

初めてあった人には几帳面だと思われませんが少し話すとおまえはマイペースすぎと言われます。いろんな私が居るんです。どれも私なんです。みんなは違うのかな。

行方不明 T・I・8・I・C (チーム今どき8ミリ今どきカセット)

26分 8ミリ Iトラ

【コメント】映像作品と音響作品をせーので合わせるチームの5本目です。今回は過去の映像と過去の音だけで作ろうという企てで、記憶はすぐにどこかへ行ってしまって、集めようとするドンドンどこかへ行ってしまうことに改めて思い知らされ、だから記憶は現実とは違う、それで良いんだと納得しました。
だからロマンチック好き。

【プロフィール】ほしのあきら 1970年ハイロ発足時に代表に祭り上げられ、有頂天人生がスタート。某別団体の“ハイロは☆のがお山の大将”発言聞いて、すっぱりやめて別の上映グループ作ったのが85年。失敗して97年に出戻るも温かく受け入れられ、また有頂天。PFFでの変態映画の父とか、フィルムメイキングの著者とか、昔の名前が重苦しくてかったるい。今の私は素人和太鼓作曲家兼演奏家。年に1度ボス横溝のミッションで8ミリ作家。これからは4×5写真作家という肩書きで自分を縛っちゃおうかと考えている2月の寒い夜。

横溝千夏 (よこみぞちなつ) 1980年東京生まれ下町育ち。多摩美術大学卒業後、会社員の傍ら映像制作。主にカセットで音作り。カセットテープはMDやらCDよりも繊細ではないが私の無理を一番きいてくれるので、長いおつきあいになっています。マイクもスピーカーもついでるし、これ一つで何でもできるわ、と思ったり。肩書きは誰にも言われたことないけど、ミュージシャンということにしています。毅然。

アピア特性カレー
飲み物などご自由に

午前1時30分 休憩トーク 司会：大房

第三らうんど 午前1時50分

進行 ほしのあきら

Memory ジョンヘジン **7分 miniDV**

【コメント】 たまって、かさなっていくメモリー
わすれて、なくして、けされていくメモリー。

【プロフィール】 ジョンヘジン（じょんへじん）マイスタイルでごちゃごちゃにマイペースでちょこちょこカメラと遊んでいる子。

砂糖菓子と二重包帯

あかねとYoo **10分 DVD**

【コメント】 7歳から仲の良かった同級生の娘さんとの不思議な出会い。一緒に何かを作ったらお母さんのDNAが見えるかもしれない。テーマを決めて別々に撮影。合体・編集。砂糖菓子を二重に巻いた味。

【プロフィール】 あかね。武蔵野美術大学映像学科写真専攻在学。歩く写真作品を制作

Yoo（よお）。Yooカンパニー代表。プランナー・ディレクター・カメラマン・主婦。美しい正しい日本語の会々員。最近、茶道を勉強中。

城 井上弥那子、上野倫可、二宮正樹 **30分 DV**

【コメント】 私は5年以上彼と一緒に住んでいる。でも私には子供の頃から住んでいる城がある。それを私は精神世界と呼んでいるが、一人で浸るには気持ちの良い孤独の世界だ。28歳になった今、私の大事なお城は迷宮となり、彼といっても、お城ばかり遊んでいる。ナニができなくなっちゃっていいじゃないの。私は私を楽しむ。私は私の中に住んでいるのが一番楽しく、最高に輝ける瞬間の連続。撮る前は、生きることはそんなことだと私は思っていた。

【プロフィール】 井上弥那子（愛に生きているつもり）

上野倫可（なにをやるにもお尻が重い）

二宮正樹（雨の日は野良猫の心配ばかり）

かつては三人で同じペットボトルの水を飲む日々を送りました。カメラを抱いて海と大地を撮りました。そのとき出会った本当の日本の大人たちに恋い焦がれ、今それぞれが紆余曲折の道を進んだところ、ばったり再会。それ以来、三人で夜な夜な昼昼集会して撮ったのが今回の作品です。

MEMORY IS LONG 宮崎和海 10分 DVミニ

【コメント】 スーパースターっていないね。2008年制作。

【プロフィール】 宮崎和海（みやざきなごみ）映像専門学校卒業後、充電期間経てヒロに作品を出品するようになり2008年よりヒロ入団、DIMENSION*TRIPを担当し今にいたる。

美少女戦隊トゥエルブフワーズ。乙

サクライトモヒロ 10分 VHS

【コメント】 1万2千年の悪魔！平和な村に危機が迫る時！！再び伝説の12少女は甦る！！～4年ぶりの新作CG・3Dアニメです。ア●ターも吃驚！片目で見れば飛び出す?!かも……。伝説の機体（DreamCast）で快調編集中？！

【プロフィール】 出生身長体重好きな食べ物趣味その他不明。フェストになると出沒。

あなたが証人**Providence** 角南誠 約3分 16ミリ

【コメント】「プロビデンス」とは、摂理という様な意味があります。フィルムに触れながら悩みつつも、色々な方法で像を作っていく過程は、偶然性に大きく左右されますが、自分でも思わなかった驚きも与えてくれます。

そういったものを選びながら出来てきた過程を表した言葉です。

【プロフィール】 角南誠（すなみまこと）1982年8月15日生まれ。岡山県出身。最近映画は名画座とフィルムセンターで見る事が多く、名画座について考える事が増えました。漫画も執筆しています。北冬書房より『幻燈10』発売中です。

**2 is 1 (フウ イズ ヒイ)** 鹿田楓 4分 16ミリ

【コメント】 ほしのさんが授業でフィルムカメラの仕組みを教えてくれた。「撮ってる

ものは見えてない」、そこから出来た映画。

見えてないなら意地で見つめてやろうと思った。どうしても何か見たかった。私は水を見つめる事にした。見えなくて、見える、水。一番気になる生き物。水って動くのよ。生きてるから。生きた水を見る。

【プロフィール】鹿田楓（しかだふう）小三からバレエ始めて、同時にバンド組んでドラムやりだす。それから高校まで鹿田楓の半分はドラム、半分はダンスで形成されてたのに、高三の夏休み、何を思ったか進路を美大に決める。多摩美映像演劇学科入学。フィルム写真やろうと思ってたのに、なんかフィルム映画やってる。ノリと勢い。「めんどくせー」って言いながらキネカリとかアニメ作ってます。

午前3時 休憩トーク 司会：ほしの



いよいよ・・・さいご・・・ですな♪

第四らうんど 午前3時20分～
進行 ほしのあきら

記されても、求道心は奥底に隠されていた。足がめり考えることができるということ。取り戻せる可能性があるということ。まだ見ぬ世界への臆病な心は引っ込めて、1mm、前へ。1mm、それは思いを馳せること。明日へ、新しい自分へ。

【プロフィール】菅原里美（すがわらさとみ）フリーターです。事務スタッフ、ホテルで配膳、イベントスタッフ、たまに女優。将来は好奇心旺盛な教員になれたらいいです。

風 奈優士 7分 DVD

【コメント】散歩をしていると、オカズを踏んだバスドラが響いた。風景はリズムになって日常を飾っていた。

【プロフィール】奈優士（なゆと）文化学院デジタルデザイン科卒。東京原住民のメンバー。作詞・作曲、デジョリドゥ、ギター担当。インド、タイ、カンボジア、バ

リなどアジアでのライブ出演。カメラマン。インドでのワーキングホリデーでの生活写真をブログ『砂を詰めて生きる』で紹介。インド英語を生かして、現在、六本木のインドレストラン・モティーでアルバイト。

近今館 Raspberry children 裕美佳 17分 DVD

- 【コメント】毎日の繰り返し。不条理。無言の圧力。自由になることへのあこがれ。しがらみから逃れようとして逃れられないもどかしさ。一皮剥かれればバレリーナの格好をした哀れなピエロ。ほんの少しの勇気で哀れな操り人形は人間になれる。
- 【プロフィール】裕美佳（ゆみか）東京造形大学絵画科在学。油絵画家。アーティスト活動としてパフォーマンス、絵本製作。帝国ホテルでの結婚式、宴会のサーバー整体師。モデル。

あいたい 女の子篇 製作・監督 繁田健治 5分 DVD

出演 近藤結 脚本 鹿沼雄一 撮影・メイキング撮影 高嶋芳男／白原秋冬
編集 加藤功／繁田健治

- 【コメント】おおまかに言うと、この作品は私の実体験をもとにしたものですが、結局見えない補完部分は思い込みで作っています。
- 「女の子篇」と題したのは、当然男性側のドラマが存在するからなのですが、「男の子篇」を製作するかは現在検討中です。
- また、この作品には2つのバージョンが存在し、その選択は上映する側の方の判断にお任せする事にしています。
- 【プロフィール】繁田健治（しげたけんじ）四半世紀程度前から「萌え」を研究。もともと当時はそういう言葉がなかったので苦労しました。時代で価値観は移り変わるのでも春も冬も体験して来ました。おそらくそろそろ冬の時代が訪れることが予測されますが、次の春も同じ場所にいるでしょう。

夢日（むじつ） タケヒロ雄太 5分8mm

- 【コメント】離人した意識は、まるで自分を後ろから見ているような感じがする。意識という視覚が、ゆるりと無自覚に陥ってゆくのを感しながら。
- 【プロフィール】タケヒロ雄太（たけひろゆうた）近頃意識していたいと思うこと/受けとった感動を記憶に留めていく。シンプルな事で、されど難しい。そんな当たり前の一片をもっと充実させたいと思っています。

霊吐息 鈴木宏忠 **10分 8mm**

【コメント】何も写っていない生の8ミリフィルムに、線香で穴をあけたり線香の熱で表面をなぞったりして構築した作品です。同じ呼吸で線香をフィルムに近づかせても、まったく違う表情になり、一コマ一コマ生き物の様に表現されます。映写とは光と黒味の連続写真なんだと実感してご覧いただけたらと思います。

線香の熱の息づかいが伝わればと幸いです。

【プロフィール】鈴木宏忠（すずきひろただ）アート・ディレクター／グラフィック・デザイナー。東京都北区のおふる屋（現在は駐車場）に長男として、生れる。美大をめざすも浪人中に映画にハマってしまい映像の専門学校にすすむ。ハイロには98年に入団。“分かりやすい実験映画を”と、カメラを使わず映画をつくる『鈴木研究所』を始めて足掛け十年になる。

30代から40代に変わり、見つめる視野をもっと拡げて“濃厚で分かりやすい実験映画を”発表していきたいと思っています。

先日お会いしたとき、少しお疲れのように感じました。

周りの人を気遣って、自身のことを後回しにしてしまうのではないかと、少しおばちゃん心が働きました。

唐突ですが、昨日虹がでてました。 濱中路子より

特集

39年目の総括と40年目の展望

その1 ハイロ批判 序説 ーそうするしかないだろう

ほしのあきら

(1)

ハイロにいる限りは「ハイロをどう盛り上げていくか」って言うのを考える。

それが伝わらない。いつもどうりのことをやっている感じが嫌だ。

しがみついているのだろうか。

ハイロにいれば、作家だという意識が手に入り、自分の作品も見てもらえるから、居心地が良い。それでは客がついてくる訳が無い。

客にこびるのでなく、客を挑発するのが、ハイロの、アングラの役目。

コアな客に“頑張ってるね”って言われたら終わり。初心者に“何だこれは”って思われなければ終わり。

その一夜の一瞬一瞬に集中して、全てを賭ける気でやっていかないと。その夜にインパクト残せなかったら終わりって言う意識が欠けている。

映画について、表現について、自主について、生きるについて、アンテナ張っているのだろうか？

(2)

上映にも話にも、日頃の訓練ができているとは思えない。

他のコーナーには負けたくない！って思っているのだろうか？

前のコーナーより面白くしてやろうと思っているのだろうか？

努力しないで、持ちつ持たれつなんてダメだ。競い合わない。

ゲストや話し相手や今見た映画と真正面から向き合っているのだろうか？

“ハイロに行けば、これが見られる”っていうオールナイトを作ること、意識してるのだろうか？

ハイロじゃないと見られないよっていうものを作り出すこと、どれだけ意識しているのだろうか？

自分のやることに負荷をかけなければ、繰り返し・・・繰り返しは居心地が良い。

そんなに甘くない。

次のことなんて考えない位の気持ちで集中してやって欲しい。

(3)

ハイロっていう幻想に囲まれて、守られて・・・

一度ハイロから出る勇気が必要ではないか。作品作って反省して、人前で話して反省して、経験を積むことを大事にしなければ。

みんな他では上手くいかなかった過去があるはず。はみ出した自分を輝かせようと思ってハイロをやっているはず。

早く凄くなって欲しい。もうちょっと頑張っって欲しい。

☆があと何年ハイロにいられるか、そう考える時間が多くなって来た。

中途半端な気持ちだったら、☆がいなくなったら無理だと思う。

ゲストや仲間をヨイショしたところで「観客としての自分」が分かってしまうはず。客に媚を売るんじゃないで、夢を売って欲しい。

自分の人生、自分のストーリーをきちんと見せて欲しい。

今のハイロは☆達が作ってきたものと違う。

気がつかないのか？客との間に距離ができてしまっていることに。

客にまた来てもらうのも仕事だし、ハイロをもっともっと魅力的にするのも仕事だ。

(4)

ハイロに興味を持つ人は意外に多いと思う。興味はあっても実際にアピアに足を運ぶのは、ハードルが高い印象があると思う。コアな客と、マニアックな映像論と作品と・・・

作品は自分の生き方の反映だから、もっとハードルが高くなって良い。そこから生まれる話はもっととていねいに、分かりやすく、入り込みやすくしなければまた来たいとは思わないだろう。クオリティが実は低い現実。

これぞハイロ！を作る意気込みを持たねば。

わたしは自主映画の初心者こそハイロを見に来て欲しいと思っている。

彼らは勇気を出してアピアに足を踏み入れているのだ。

運営メンバーの居心地の良さを保証するハイロであってはならない！

やりながらの『気づき』が形になっていくことが、わたしがいつも予告で書いている『偉大なるマンネリ』なのだ。

“なんとかしたい”、“なんとかしなければ”と思えばその方法は経験的に出てくるだけの時間をやって来たはずだ。自分のせいにならなければ何の解決にもならない。

時代によって求められることが違うところはあるから、何をどうすれば良いか分からないところがたくさんある。

でも時代に無関係なところにハイロの根本の精神があるならば、もっと自分をアピールすることだ。

(5)

「チラシ」・・・毎回同じでパッと見て新しいのか古いのか分からない。

「開場から開始まで」・・・ぼけーとした柴田、鈴木が目立つ。宮崎がどこにいるのか見えない。何もすることがないなら、せめて受付にいて笑って客を迎えて欲しい。全体に客に向き合っていない。せめてハイロの名札でも付けた方が良い。

「出張クラブ」・・・他人と違うことのアピールが弱い。家族や仕事との関係の作り方が映像の成立にどう影響しているのか伝わらない。『普遍的日常映画』の定義が見えてこない。家族や周囲と撮影者のギャップで笑っても、また見たいとは思わない。

「心動交差点」・・・ゲストをヨイショしても、観客に見透かされている。映像に対する考え方で火花が散っていいはずなのに、ナアナアで済ませている。自分の作品をゲストにぶつけていないのは自信がないからか。

「デメンショントリップ」・・・映画について語れていない。自分以外の映画の批判がない。追求しているものが伝わらない。話が閉鎖的。かといって、マニアックな映像論が見える訳じゃない。再撮影がなんなのか見えない。

「話し相手」・・・話を引き出していない。客の気持ちになつての質問や意見がない。そのコーナーの特徴や担当者の個性を引き出していない。

「柴田新企画」・・・形ができないなら、休団して作家としての自分を鍛えた方が良い。せめて役割を自分で作っていかなくてはもったいない。

「終わり」・・・客に話しかけて、また来てくれという気遣いが無い。参加作者に対しても同様。

(6)

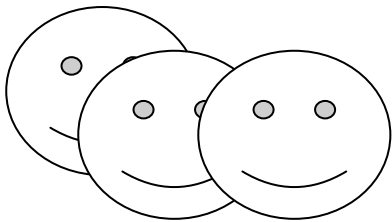
数年前までのハイロは予測がつかないオールナイトで、私自身が毎回わくわくして体調を整えていたんです。普段は活躍する場を持たない作家達が水を得た魚のように躍動していたからです。しかしこの頃のハイロの各コーナーはそれぞれに応じた役割を果たしているだけ・・・と言った空気なんです。それは客に対する応対も含めて上映会自体の空気としてです。

商業映画の世界に自分の居場所は見つからず、出会った実験映画に衝撃を受け、とりあえず、そういう道を歩こうと思ったことと自主上映会をやろうよという話が持ち上がったことは偶然で、偶然は最大の必然だと、39年前の話です。

ハイロは自分にとって飛躍の場所になった、他の何よりも思い入れのある場です。でも(状況も変わったし)正直、限界を感じて24年前に辞めて、いろいろやった上で、やっぱり自分の居場所はハイロだ、と思った時に大房さんがハイロを続けていてくれた、これは感謝しか無いと同時に必然だとも感じました。

映画と言っても様々だし、自主映画とか実験映画とか言っても多種多様だし、同様にハイロと言ってもこれがハイロだという定義がある訳じゃありません。なるべく型にはめないで動こうとして、だからハイロの上映会にはいろいろな意味が散らばっているはずなんです。上映会に散らばるハイロの意味と、動かしているメンバーの意識にずれが起きているのだと、感じているのが冒頭の発言の真意であり、意味です。

40周年の節目の年に、捨てられるものは捨てて、新たに生んで育てていく。ハイロという曖昧な運動体がフィルムが死んでいく21世紀に何を残せるのか。見てみたい。



その2 また一から作品を作りたいーそうするしかないだろう

宮崎和海

僕は自分を知り尽くしたかのようになり、次から次へと作品を作るようになってしまった。パワーもない作品がいっぱい作ってしまった。コーナーのテーマは再撮影。今年からは劇映画や他の作者が作った映像作品を再撮影して作品にするという事をやってきたが結論から言うと失敗であるし、自分自身の成長も出来なかったのです。根本的に再撮影に縛られたのではなく自分自身が縛っていた気がするし作品自体もボケてしまっていた。

何でかなんてそう簡単にわかりませんが、これは言える。描けなかった。ほんの一瞬見える香りや光。当然世界なんて到底無理な話です。でも作ったのは自分です。お客さんが見たら「ああ宮崎の作品だ」なんです。たぶん本能的でないところで何かが出来上がってしまったのではないかと思う。生活の中で作品を作る。いろんな事が合っている事を考えて作る。それは全ての人に言えると思う。対人関係や物に対する姿勢。有ったことうじうじほじくり返しもせず、これから起こりうる事を当たり前の様に起こる事として僕は生きていた。こんな事をここで書くのは如何な事だと思いが僕にとってそれが全てだ。

正月僕はカメラを持ってしばらく歩いた。ホッとした。まだ本能がとやかく言う。人間らしくなりたい。また一から作品を作りたいと思います。

その3 一皮むけるーそうするしかないだろう

鈴木宏忠

去年はアピアが40年近く活動していた渋谷から学芸大学の碑文谷に移り、住宅地のど真ん中の慣れない場所での上映会となった。

当然ながら客足も心配され、まいどのごとくコーナーや意識の向上を求められた。

上手くプレゼンできない自分が歯がゆかったし、考えている事の半分ぐらいしか喋れなかったし進まなかった。

ただただ反省である。他のコーナーの進行役などでは、もっともっとしゃべりで盛上げられず、空回りしてしまった。

なんだろう。妙なプレッシャーと緊張で自然体になれなかった。結果、毎回ぐだぐだした感じが残ってしまった。自分も含めとにかくグダグダになりがちだった。ライブだと言うのに

他の作品についてまともな意見が言えなくて話が広がらず、困る。と言う悪い展開が多かった。

今のハイロに足りないのは、自分たちがやるべき『何か』や『伝える事』だ。しっかりした核があれば、ぶれないと思うし、分かりやすいし、興味深くなるはずである。

今年はそういった、本気『核』をみせるハイロにする。

私がハイロに参加して11年、鈴木研究所も9年目である。

“カメラを使わず、フィルムで実験映画のプロセスを、分かりやすく解説して面白さを伝える”この鈴木研究所の誓約は守りつつ、もっと、マニアックで濃厚なコーナーにしていきたい。

●線香で映画をつくる。を極める。

●新たな表現を発見する。

この二本立てを突き詰めて、もっと自分自身を突き破って行きたい。

その4 ちょっとあばれていいですか~そうするしかないだろう

マエダシゲル

「肉体クラブ」から「出張クラブ」となり、この一年で自分の中の映画感、仕事、家族との生活の中での作るリズムは詰められてきたと思う。それはあくまで対自己（自分）の詰めに拘泥していた。そのときその場でフィルムをかけることに焦燥していた。それがいけないことだと自己否定はしないけれど、観客にどうハイロを打ち出すのか。アンデパンダンという上映会に身を置きながら、自分のことで精一杯で、気がついてみたら、発信すべきお客さんの顔がみえない。作ることとみせることの溝、なかったわけではない。あったのだ。今の私はそこに立ち竦んでいる。不安だから振り返って確かめたい、振り返えらずに前に進め。気持ちと意識かきしむ。揺れる。振り返ってみると、無差別無審査という甘い水に（それは自分の関わる姿勢の問題なのだけれど）、自分がどっぷりと浸っていったか。いた。そういう危険危機感を感じている。

…だけど、独りよがりでももやもやしても、確信のない直感でも、撮影しなければ分からない、突き進んでしまえ、今後もそのスタイルはかわらないだろう。事前の思惑では考えられない、それでしか手にはいらないものがある、「誰のためでもない、自分のために映画をやる」、それができるのが個人映画だ。それを信じて映画を私は作ってきた。だったら、そのこだわりをもっとスクリー

ンにぶつけてやろう。ちょっとあばれていいですか。…やるか。

…だから映写技術の私は…メディアが多様化しようとも、なんとか作りたい、持ち込まれる作品の情熱は「8ミリだ DV ミニだ」というメディアの選択を超えて、手を伸ばして手に取った、たまたまそれが8ミリフィルムのカメラであったり、DV ミニのカメラであったり、出会ってはいないけれども必要ならば携帯電話の動画で撮影、上映でなく配信します見てくださいもありえるだろう。いろいろ手にして自分の身体感覚にぴったりとあう、合うように修練を重ねる。そのことこそがこだわりだ。それで作品が生まれていけば、メディアそのものに縛られる必要はない。商業映画や TV でなく、なにものにも縛られず自由に映画を作る。そんな環境準備で望みたい。「上映できるよ」「配信できるよ」、液晶画面の中からも、そんな知らない個性に呼びかける。

だから、なんでも来い。

…私だって観客だ。ファンもオタクもマニアも関係ない。基本はみんな映画好き。だよな、「ちがう個性」「こんな映画もあったのか」、そんな作品に出逢いたい、出逢える、そんな上映会。作家と観客の期待の根幹は今も昔もかわらない。観客の私はそうおもう。ちょっと膝を突き合わせて、「映画」について語り合う。野次があっても、嘲笑があっても、拍手があっても、楽しむことにかけては、プロより上。それがアマチュア魂だ。

その5 日本にメカスはいない～そうするしかないだろう

角南誠

『メカスの映画日記』は僕にとって大切な本だ。学生時代には、よく悩んだ時や迷った時に、その情熱的な言葉に勇気もらった。今でも時々読み返す。

メカスは、アメリカの実験映画にとって、いや、今日まで続く映像表現というものにとっても、とても重要な人物だった。

メカスにとってボレックスで撮影するという事は生きる事と同じだった。言葉の通じない世界での唯一の言葉だった。

そうして、生まれつつある、新しい映画に、自分の居場所を見つけたのだろう。

メカスと同じ生き方が出来る人がいるだろうか？そんな人、いるはずがない。

アメリカにだって居はしない。リトアニアにもいない。日本にもいない。メカスはメカスなのだ。どんなに憧れたって、熱っぽくなったって、メカスの変わりにはなれやしない。いや、なる必要なんてない。それは映画が教えてくれている。作る人が違えば、出来上がる映画は違うのだ。メカスはそうゆう映画をこそ大切にしていた。そこに僕は共感したんだと思う。

自分がそういう世界に触れたのは、偶然かもしれない。けれど、確かに美しい世界だった。何物にも変えられない世界がそこにある。それが知れた事は、やはり良かった。今、そういう世界に対して、自分が出来ることはどんなことだろうか。金も無い、頭も悪い僕には、人のためなんてことは出来ないし、自分のためにとゆうのが本音だろうけど。まだまだ色んな映画を観てみたい。色んな人生を感じたい。その為には、上映会を開かなくては。上映会を開くのは、一人ぼっちじゃ大変だよな。だからヒロでやってみようっと。これが今、僕の中のヒロである。

そして、

40年目と言われても自分はピンとこないので、自分になるべく嘘つかず、人と一緒に上映会、続けていけたら儲け物。をモットーに、これから続けていきたいと思えます。

です。

その6 おさしみラボから今年のハイロTodayへ

ーそうするしかないだろう 柴田容子

「なんだか面白くて仕方ない」の遊び心が継続して、何だか面白そうなハイロの上映会の一員になりたくて、メンバーになった。ハイロの上映会に行けば、エネルギーが湧き出る作品に出会えた。何だか解からない？面白い・カオスの不思議だった。今までハイロ上映会が40年続いていたのは、ここにしかない映画上映会だったから。

どきどきの映画人が集まるどきどきの映画上映会ハイロ。私のコーナーだった『おさしみラボ』は3年続いた。水の中で息を止めていられるぐらいの1分をおさしみ一切れとして、その時間を目安に作品を募集したところ、映像を手軽に使いこなせそうな1分ぐらいという時間のキャッチで、新人が集まった。☆組と柴田組とで対決し、『おさしみ』と『つま』の看板を出して判定をした。シネマフェストで『おさしみ』判定の作品のみを繋ぎ、おさしみ一切れはお魚になるかもしれないと過程して上映した。失敗した理由は、柴田がコーナーの責任者として、作家と作品に対する細かいケアが足りなかった事、柴田組の作者が上映会に来ないことが問われ、好評であったにもかかわらず☆のさんが降りたことで、自分一人でできなくなった。新しい企画を立ち上げるように求められたが、1年間できなかった。反省している。

どきどきの今までの40年を「ハイロクラシック」と、これからのハイロを「ハイロ Today」と仮説して、上映する形やメディアは今時の流れに乗って、遊びで始まった映像制作をあまねく多くの人々が、『みんなに見せられる』開かれた場として、新しいものを許容できる上映会を提供したいと思う。

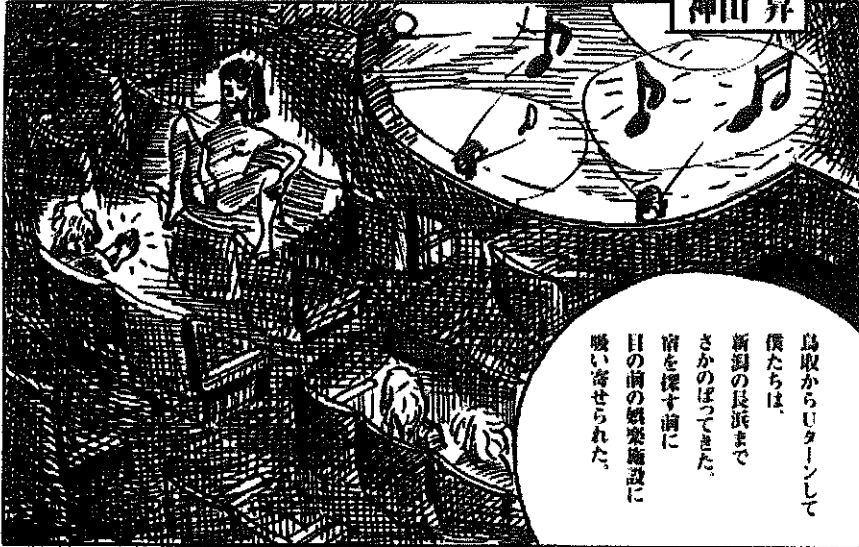
自分だって遊びから始まった映像作り。初心にもどれば、難しいこと◎FZ◎FZFだ fdなんて何も知らないあの頃。携帯ムービーや Nano ムービーで、お手軽に映像をコミュニケーションにして生活の一部にしている10代から、8ミリや

16ミリ個人自主制作をしている熟年者の世代も、作ろうとした原点は同じ。ハイロにしかない場を多いに利用してもらい、それぞれの映像時間を共有したい。

日本海のかたつむり

5

神山昇



鳥取からリターンして
僕たちは、
新潟の長浜まで
さかのぼってきた。
宿を探す前に
目の前の娯楽施設に
吸い寄せられた。



正月以来だな
しかし、
船橋に比べて
ガラスキ

僕は
サーカスの
方が
好きだね



茶泊まりで
安けりや
文句は言わない

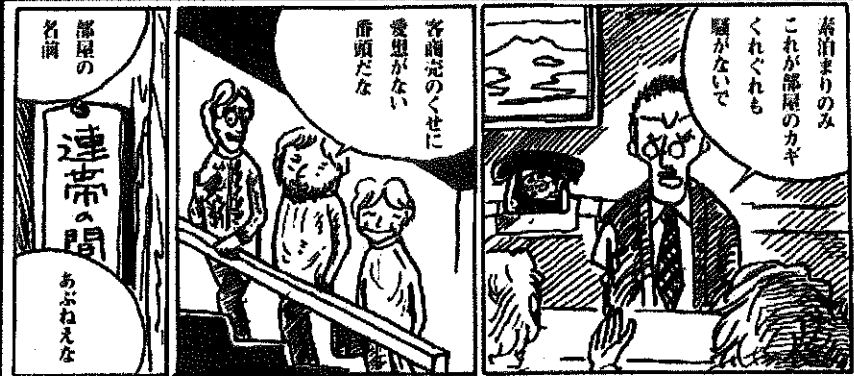
じゃあそいで



ズーッと
人氣が
なかったから
人恋しく
なつらまつた

そうだな

それでは
お宿を...







昨年5月から連載した【日本海のかたつわり】は、今回で終わります。現在まで続く青春物語の一部で、書てみれば未完ですので、休載とわった方が正しいのでしよら。

うじうじ物語

神山昇

4) 貴重な体験

ありがとうございました。

広告のデザインは、クライアントさえオーケーならいきなりメジャーデビューである。無名性でも本人の満足感は大きい。何万人の目に触れるのだ。

しかし、アートは作家性が高い分、そうやすやすとメジャーデビューできない。デビューできなければサイドビジネスになってしまう。たぶん、そこが映画作りから離れたきっかけだと思う。これが僕の性だ。食べていける。欲しいものが手に入る。最短の近道が広告デザインの仕事だと思ったのだ。

…というわけであっという間に現在に至った。

20代の思い出の片鱗を描かせていただいた「日本海のカタツムリ」。今を形成している自分は、過去を踏まえてはいるが思い出は、生きる糧にはならないと思っていた。ところが、今回連載させていただ



いた漫画でその考えも変わった。ある日、会社の仲間がこの漫画は誰に向けて描いているのか?という鋭い指摘があった。読者は誰か?声を出していることではないが「自分」である。テーマもストーリーも無く、何ら作品として形成されていない作品である。ただただ、思い出を楽しみながら、作家になったふりをさせていただいたのである。過去を懐かしむという非創造的作業を、さらに

印刷という不特定多数の方々にむけて無責任な発信をこころよく引き受けてくれた星野編集長には大変感謝しています。ありがとう。

さて、今回で僕が担っていた表紙、うじうじ日記、そして、漫画「日本海のカタツムリ」は終了です。数十年ぶりに「作家」気取りの時間を楽しませていただき、きえらく満足しました。

本当にありがとうございました。又の機会に…。

昨年5月から連載した【日本海のかたつむり】は、今回で終わります。現在まで続く青春物語の一部で、言ってみれば未完ですので、休載といった方が正しいでしょう。

はい

お知らせ

○次回は 5月28日 (金)

ケツが痛えぞ

ハイロのオールナイト

もちろん

上映作品募集!

昨日までのいきさつなんざ、さらりと捨てて

さあ!ハイロの原点、**フリースペース**

作られた作品は上映される権利がある。

クソでもミソでもどんと来い。

世の中、いろんな映画が

あって当たり前だのクラッカー。

作ったら見せよう、見よう 発表の場は

ここにある

もちろん

鈴木研究所はさらに面白く、新しい企画もスタート

もちろん、未知を目指して

だって40周年に突入だから

偉大なマンネリ！ハイロは進む

2 0 1 0 年 ハイロ 企画 概要

● ハイロクラシック & ハイロ TODAY

ますます映像が身近に手軽になっている。今と昔の映像と私たちの関係を観てみよう。

考えてみよう。「まだ見ぬ作家へ呼びかけて」そして「気になる作家作品の再発見」。

マニアックな映像を作っている人、前衛的な作品を作っている人、未来につなげる作品もある。フィルムにこだわらず、ビデオやメモリースティック、ブルーレイなどメディアを問わず枠を超えてみたくなりました。

○5月…まず

モバイル・ナノムービー（仮題）

Ryou 19歳 ラジコンモバイル・ナノムービー歴4年 作品19分

菅原里美26歳 モバイル・ナノムービー歴数年 作品20秒

裕陽土19歳 モバイル・ナノムービー歴4年 作品1分強

その他、「気になる作家作品特集」、「特集70年代・気になる作家作品、その時代」など。

そして ハイロ名画座

もし、自主制作の映画や、これまでに作られた世界の実験映画の名画座があったなら？

そう考えた時、わくわくするのと同時に、それをハイロがやってもいいんじゃないかと思いました。

そこで、ハイロ名画座と題して、僕らが見たい！まだ見たことない！と思う映画を、自主上映という形にこだわりながら、実験映画の世界に、より深く触れて貰う機会を作っていきたいと思います。

…第一段として5月はカナダの実験映像作家 **マイケル・スノウ** の特集を、彼の代表作でもあり、実験映画史に残る『**波長**』を中心に考えています！映画って何だ？そういう気持ちになるプログラムを企画。